

《ゼミ活動報告》

米軍基地が沖縄にもたらしたもの（熊本ゼミ）

本稿は、2022年度熊本ゼミ（3年）による沖縄研修の成果報告書である。2019年までは学科所属の学生有志を募って実施していた沖縄研修だが、コロナ禍で実施できなかった2年間をはさみ、3年ぶりの実施となったことから、まずはゼミで行うこととした。

前期から沖縄についての事前学習をはじめ、学園祭休みの期間を活用して研修を実施した。なお初日と最終日は、沖縄戦や米軍基地問題について現地を巡るガイドプログラム、および議論を深めるための独自のワークショップ・プログラムを提供している「株式会社さびら」のコーディネートを受けている。また二日目も同社スタッフに同行いただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

〔沖縄研修概要〕

・実施日：2022年10月31日（月）～11月2日（火）

・訪問先

初日：沖縄県平和祈念資料館、佐喜真美術館、道の駅かでな

二日目：辺野古集落、イオンライカム（基地跡地利用の実例として）

最終日：普天間第二小学校、上大謝名さくら公園、沖縄国際大学、嘉数高台公園

1. 沖縄県平和祈念資料館

向井 芳三都

沖縄研修初日のテーマは沖縄戦を学ぶことであった。その最初の研修は平和祈念資料館でのフィールドワークだ。あいにくの雨により「平和の礎」を扱ったワークショップを行うことは叶わなかったが、予定を若干変更しつつ平和祈念資料館での活動を行うこととなった。

＜平和祈念資料館の概要＞

1975年6月11日、平和祈念資料館の前身となる沖縄県立資料館が、沖縄国際海洋博覧会の開催に合わせて開館した。その後、沖縄県は「県立平和祈念資料館運営協議会設置要綱」を制定し、1978年10月には展示内容を日章旗や武器類、軍用品や、ただ遺品などの寄贈されたものを飾っているだけのものから、沖縄戦を伝承することができるよう

な住人の証言や旧帝国陸軍による県民虐殺などの内容など、反戦平和運動に繋がるような展示物に変更するリニューアルが行われた。

1996年には移転改築事業で「沖縄平和祈念資料館」の移築が決定し、1999年6月に着工、予算74億円を投じて新資料館を建設した。2000年3月15日には旧資料館を閉館し、同年3月29日に新資料館の開館記念式典を行い、4月1日に一般公開を開始した。

展示内容は沖縄戦を住民の目線から捉え、「米軍占領下の沖縄住民」、「アジア・太平洋の中の沖縄」、「基地の重圧と住民」、「燃え上がる復帰運動」、「復帰した基地住民」、「21世紀の平和創造と沖縄」という内容となっている。

資料館の目的として、沖縄県平和祈念資料館は「戦争の犠牲になった多くの霊を弔い、沖縄戦の歴史的教訓を正しく次代に伝え、全世界の人々に

私たちのこころを訴え、もって恒久平和の樹立に寄与するため、ここに県民個々の戦争体験を結集して、沖縄県平和祈念資料館を設立いたします。」としている。

<ワークショップの概要と感想>

前述したように、当日は雨の影響で平和の礎を扱ったワークショップを行うことができず、資料館内での調査、ワークショップのみとなった。

中に入りまず行ったのは第1室、入口付近の近代付近の沖縄から沖縄戦に至るまでのアジアの動きをガイドの方の説明を聞くことだった。そこでどのようにして沖縄県が歴史を歩んできたのか、そして太平洋戦争最後の決戦場となっていたのかを学んだ。

歴史を学んだ後、第2室ではその激化する沖縄戦を住民の視点から学んだ。第2室の展示物は、その被災状況などを立体地図や映像、実物などを展示し伝えるものだった。どのような場所から米軍が攻め込み、どの場所に防衛ラインを引いて戦ってきたのか、どのような場所を戦地としていたのか、そして住民はそんな戦地をどう生き抜いたのかなど、ガイドの方の説明を聞いて当時の状況を学んだ。

第3室では沖縄戦中に住民が生きていた環境を地上、そして地下にあるガマの再現の展示を回りながらガイドの方の説明を聞いた。特にガマの展示では米軍の掃討戦により追いつめられる日本軍、そしてそれに巻き込まれる住民の様子が生々しく作り上げられていた。その中でも泣いている赤子を黙らせるために、味方であるはずの日本軍の兵士が赤子の母親を恫喝していたという説明が、戦場の悲惨さ、そして巻き込まれた住民の苦しみを感じて特に印象に残っている。

第4室では、ワークショップで取り扱うことになる沖縄戦の体験の証言を少人数に別れて学んだ。どの証言も「死」と隣り合わせの戦争体験ば

かりで、想像できないほどに凄惨な状況であったことが伝わってくる証言だった。特に比嘉永俊さんの「当時は弾が直撃して死ぬならすぐ死ねて幸せだとも考えていた。」という証言が、死んでもいい、という絶対に考えられない状況にまで追い込まれていたことが伝わってきて強く印象に残っている。

そして第5室では戦後米軍の占領下であった沖縄がどのように日本に復帰し、現在の形になっていったのかを展示で学んだ。戦争の後も元々の生活に戻れず、しかしあきらめずに復帰に向かう時の流れを見ることができた。

その後、展示を見終わってからまた集合してワークショップに取り組んだ。第4室の証言をメモしそれに関連する資料をほかの展示室で探してその証言についての見識を深め、グループ別に共有した。関連する資料を探して見識を深めた結果、最初に証言をメモしたものよりも内容が詳細になり、お互いの発表もわかりやすいものになっていた。言語化をすることにより、各々の沖縄戦についての知識が深まった事を肌で感じた。

このワークショップを通して、痛ましい沖縄戦、そして平和への考え方を深めることができた。ただ展示を見たり読んだりするだけでは、自分の身に引きつけて沖縄戦について、平和について考えることはなかったと思う。

2. 佐喜真美術館

檜森 一真

<佐喜真美術館の概要>

- 1983年 佐喜真道夫氏、画家の丸木位里・丸木俊夫妻が「沖縄戦の図」に取り組んでいる事を知る。
- 1984年 佐喜真氏、丸木ご夫妻と出会い、「沖縄戦の図」を託される。
- 1992年 佐喜真氏、普天間基地にある先祖の土地の一部1801㎡の土地を返還させる。

1994年 佐喜真美術館を開館し、佐喜真氏が館長に就く。

丸木位里（1901-1995）、丸木俊（1912-2000）は、広島に落とされた原爆の様子を描いた「原爆の図」を描いた後、沖縄の地上戦の体験からも学ぶ必要があると考えた。そして沖縄戦の地で、体験者の証言を聞き、モデルになってもらい「沖縄戦の図」14作を描き続けた。なお位里は壮大な水墨画を描く画家として、俊は130冊の絵本を手がけた画家として有名である。

なお佐喜真美術館には「沖縄戦の図」以外にもコレクションがある。ケーテ・コルヴィッツやジョルジュ・ルオー、上野誠といった「人間・戦争・愛・希望」をテーマに描いた画家が中心となっている。

<沖縄戦の図>

「沖縄戦の図」とは、丸木夫妻が地上戦である沖縄戦を体験した方々の証言に基づき、その人々をモデルとして描いたものである。丸木夫妻は「日本人の多くは体験した「空襲」を戦争と誤解している。世界で起こっている戦争は地上戦であり空襲とは全く違う。日本人は戦争に対する考え方が甘い、こういう国はまた戦争をするかもしれない。」と述べていたという。「沖縄戦の図」は、地上戦を国内で唯一体験した沖縄戦のことを教えてもらいながら、戦争で人間がどのように破壊されるかを描いた作品であり、そのことをしっかり見て、戦争をしないで歴史を歩んでほしい、という願いが込められている。

二人は数年かけて、沖縄戦に関する本を160冊以上読み、学者や沖縄戦を専門にする人々にレクチャーを受けた。そして生き残った多くの人々と、それぞれの現場に足を運びそこで体験談を聞き、多くの風景画を描いた。そして1983年に連作「おきなわの図」、翌年に巨大な「沖縄戦の図」を描いた。細かく見ると人物の着物も、日用品を運ん

だザルも、欠けた茶碗の模様も、戦争中のものがないに似ている。沖縄戦を体験したおじいさんは、コップがわりに使用した貝を指しながら、「こんなことまで知っているはずがない。ほんとうにヤマトンチュが描いたのか」と驚いていたという。そこには戦争を語る時、徹底的に真実に基づいて考えていく態度が貫かれている。

この困難な共同制作へと夫妻を向かわせたのは、広島原爆体験で受けた、ぬぐい去ることのできない心の傷だった。彼ら自身は原爆被災者ではないが、原爆投下直後の広島で人間がどうなっていくのかを見てしまった画家でもある。そこで「語り尽くせないことを誰でもがわかる形」で描くことを決意する。

戦争の強い恐怖、自己消失の脅威などの体験を「戦争トラウマ」と呼ぶが、その記憶は言葉を持たず、物語とならない「死の刻印」であるとも言われている。位里は、「目でみるものは描き残しておくより外ありません」と生存者たちの五感に焼きついた記憶の断片を見つめようと心を砕いた。しかし、沖縄戦のように死の極限まで追いつめられた人間は、恐怖や怒りや痛みを感じるだけでなく、精神を保つために感情をマヒさせていく。目の前で行われていること、自分が行っていることが現実の様に思えなかっただろう。多くの証言の中に、位里は真実をみることを回避した空白の瞳を見たのではないだろうか。

だが、「沖縄戦の図」の中央には、瞳を持つ三人の子どもが描かれている。丸木夫妻は、何ものにもとらわれず、真実を見通す子どもたちの瞳に未来への希望を託したのである。

<沖縄戦の図を見て感じたこと、考えたこと>

まず「沖縄戦の図」が展示してある部屋に入った瞬間、大きいと思った。その大きさから圧迫感を感じたのが第一印象である。学芸員の方に説明してもらったことで感じたことは、丸木夫妻がこ

の「沖縄戦の図」に対してとても真剣に取り組んでいたということだ。

「沖縄戦の図」では沖縄戦で起こったことが描かれており、現実と非現実に分けることができる。まず現実について考えていきたいと思う。沖縄戦の現実はとても悲惨なものであり、思い出したくない現実であると考え。なぜなら戦争というのは、とてもグロテスクなものだったからである。この絵を描く際に色々沖縄戦のことについて調べた丸木夫妻は、この現実を絵にすることに抵抗を感じたのではないかと思う。ありのままを絵にするには辛く、描くことが出来なかったのが現実だと考える。しかしそんな中でもコップがわりに使用した貝や衣服、他にも戦争中のものを丁寧に描かれていたのは、しっかりと沖縄戦について学んでいるというメッセージを込めていると考える。

次に非現実について考えていきたいと思う。この絵には非現実的な要素も描かれている。それは戦争を綺麗に書いていることだ。本来であれば住民、兵士の多くは手足を失ってしまっているのに、手や足がない人が描かれるはずだが、ここでは失うべきではなかった、戦争がなければ残されていたはずだとして、手足が描かれている。また、子供には目が描かれている事に関しては、この戦争を見たものとして責任を持って今後に伝えて欲しいという思いで描いたと考える。

このように現実と非現実が混ざっているこの絵だが、その意味として丸木夫妻の優しさがありつつも沖縄戦の現実をしっかりと伝えなくてはならなくて混ざったと考える。またこの絵を見たときに現実と非現実がなぜ混ざっているのかを考えさせるために混ぜたのでないだろうか。写真や動画ではなく絵であることの意味は、この現実をしっかりと目に焼き付け、たくさん考えてほしいという強い願いを込められているのだと考える。

「沖縄戦の図」の向かい側には、沖縄戦を経験した方々の写真が飾られていた。その中には足や

手の指が無くなってしまった方がいる。このことからこの沖縄戦がどのくらい過酷なものだったのかが想像できる。笑顔で答えていた人が一人もいなかったのが印象的だった。それほど沖縄戦を経験した人は他人に話すのが辛いのだろうと感じた。

3. 道の駅かでな

上田 虎太郎

<嘉手納基地について>

まず、道の駅かでなに隣接する嘉手納基地について解説する。嘉手納基地の正式名称は嘉手納飛行場であり、沖縄県中頭郡嘉手納町から沖縄市、中頭郡北谷町にまたがる極東最大のアメリカ空軍基地である。嘉手納基地の他に、嘉手納空軍基地、アメリカ空軍嘉手納基地などと呼ばれることが多い。1945年の4月にアメリカ軍やイギリス軍などで組織された連合国軍が沖縄戦で旧日本陸軍中飛行場を接収し、その後さらに拡張した基地である。

施設の中には、3700mの滑走路が2本あり、約100機もの軍用機が常駐している。敷地の総面積は19.855km²であり、嘉手納町に占める割合は82パーセントにものぼる。嘉手納町の住民は残りの18パーセントで生活するしか無いため、住民は大きな制約を受けながら暮らしている。

嘉手納飛行場が占める面積のうち、9割以上が私有地である。沖縄戦の占領以降も土地の強制接収で拡大し、地主数も11,450人になる。このため年間239億円を超える賃借料（軍用地料）が日本の財政から土地所有者に支払われており、大きな収入源となっている。

しかし、この賃借料が嘉手納基地の問題を根深いものにしてしまっているのである。確かに元の土地の所有者の方々は、土地の賃借料を現在も貰っている。だが、賃借料を貰っていることによって反対活動がしにくくなってしまっている現状がある。ならば賃借料を貰わなければ良いのではな

いかと思われるかもしれないが、そもそも勝手に土地を使われているということを忘れてはいけない。

では、基地が無くなり賃借料が止まってしまう場合の住民の方々はどうになってしまうのだろうか。その場合は、後述する跡地利用にも繋がるが、基地の跡地などを利用した経済活動で生活費を賄っていけば良いのではないかと私は思う。沖縄県のホームページにも、基地がもたらす経済効果より、経済活動に跡地を利用した方が、経済効果が期待できることも記述されており、米軍基地の撤退、移設が望まれている。

<嘉手納基地からもたらされる被害>

嘉手納町の住民は、行動の制約、土地の接収だけでなく、事故や騒音などの基地被害にも悩まされてきた。その被害の最たる例が1959年6月30日、宮森小学校米軍機墜落事故である。嘉手納基地所属の米軍機F100D戦闘機が墜落し、宮森小学校の児童12人を含む18人が死亡(17年後に火傷の後遺症で死亡)という凄惨な事故だった。この宮森小学校米軍機墜落事故は、沖縄での米軍による事故の中でも最大級の死傷者数を出してしまった非常に悲しい事故である。この宮森小学校米軍機墜落事故以外にも米軍機からの落下物による事件事故は数年に1回は必ず起こっているのが現状であり、住民は常に命の危険に晒されているといえる。

また、住民は常に騒音による被害にも悩まされている。離着陸時の飛行コースは、民間地域の上空をも通る。このため、周辺地域では日常的に騒音に悩まされており、嘉手納基地爆音訴訟として、騒音軽減を要求する内容の訴訟も提起されている。対策として、1996年に日米両政府が合意した「航空機騒音規制措置」では午後10時から午前6時までの飛行、地上活動の制限が定められている。だが、米軍の運用上の必要があれば除外できると

する規定があり、十分に守られてはいないという現状である。

また、近年では航空機による事故、騒音の他にも燃料などの流出による汚染公害も問題視されている。特に問題視されているのが、PFOSとPFASの流出源としての嘉手納基地問題である。PFASは、発がん性が指摘される残留性有害物質「永遠に残る化学物質」(Forever Chemicals)と呼ばれており、除去、浄化などの対応が極めて困難な有害物質のことである。特に濃度が高かったのが、滑走路脇を流れる大工廻川で、基準値の約20倍の濃度が検出されている。また、2016年1月、アメリカ空軍は嘉手納基地の汚染に関連する8,725ページの事故報告等を公開した。1990年代半ばから2015年8月までの日付つきの文書は、日本の米軍基地の汚染を詳述する最近の情報としては初めての事例である。その報告書は、1998年から2015年の間に約415件の環境事故をリストしているが、そのほとんどが日本側には報告されていなかった。また、1972年に沖縄が日本に復帰する前、嘉手納基地と隣接する知花弾薬庫(現在の嘉手納弾薬庫)には、800発の核弾頭と数千トンのマスタード、VX、サリンガスという地球上で最大の大量破壊兵器が保管されていたことがわかっている。

<考えたこと>

私達が訪れた道の駅かでなは、この嘉手納基地に隣接している道の駅で、学習展示室では嘉手納基地建設の経緯について学ぶこともできる。また、展望台からは基地が一望でき、騒音計も設置されているため、目と耳で嘉手納町が抱える問題を学ぶことができた。しかし、私達が訪問した日は雨のため、戦闘機の離着陸を見ることはできなかった。

学習展示室の中には、基地の周りに設置されているフェンスの実寸大のレプリカが展示されてい

た。私はこの展示物を最初に見た時は、展示物の意図を汲み取ることはできなかった。しかし、フェンス上部の有刺鉄線の向きが、基地内からみた風景と、基地外からみた風景とでは逆になっているというお話を聞き、嘉手納町の人たちが抱えた苦しみや葛藤を学ぶことによって、沖縄が歩んできた道のりについて思いを馳せることができた。

今回の沖縄研修で学んだことは、基地問題に対しては沖縄の方々ですらそれぞれ違う意見を持っている為、最終的なゴールは誰にも分からないとはいえ、弱い立場にある人々が虐げられてきた歴史、また現在も制約を受けながら生活していることだけはしっかりと理解し、まだその事実を知らない人々に自分の言葉で伝えていかなければならないということである。

4. ワークショップ

田中 謙壮

私は今回の沖縄研修において1日目に行ったワークショップから数々の学びを得ることができた。ワークショップとは参加者が積極的に主体となる体験型講座のことを指し、研修の中で行ったワークショップは、ゼミ生が主体となって、ガイドの方々と交えて沖縄をより理解しようというものであった。ワークショップには沖縄の新聞社の方が取材に訪れてくれ、私たちの研修が歓迎されているようだった。

ワークショップを行う前は、何をするか曖昧で詳しく理解しておらず、疲労や悪天候も相まって気持ちもあまり乗り気ではなかった。しかし、さびら中部オフィスに入る頃にはそんな気持ちも消え期待感さえ抱いていた。おそらく、開催場所が公民館のような殺風景な一室を想像していたのだが、実際は生活感ある場所だったため、そのギャップが気持ちを押し上げてくれたのだなと思っている。他のゼミ生も早々に積極的になっていたのも、お互い良い雰囲気の中でワークショップを行え

た。

ではワークショップの詳細を紹介しよう。まず2班に分かれ、1日目で訪れた「沖縄平和記念資料館」、「佐喜真美術館」、「道の駅かでな」で見たものと学んだことを、それぞれ付箋に記した。その後、班のメンバーを入れ替えて、提出された付箋を別の班だったメンバーに説明をし、意見共有を行った。ゼミ生全員が一度付箋に今日の学びを書くことで、1日目だけとは思えない情報量を整理して記憶にインプットすることができる。自分にはない視点を持った付箋もいくつかあったため、意見の共有は沖縄研修においては大事な役割を担っていると感じられる。

ワークショップはこの後、本題となるトピックに移り、自分が抱いていなかった沖縄に住む人ならではの視点を理解することとなる。

情報共有後、1班ごとに24枚のカードが配られた。カードには全て基地問題に関するテーマと意見が書かれてある。これは沖縄県民の証言をもとにして作成されたものだった。テーマは騒音問題や日米安全保障条約に関するテーマ、土地を提供している者の土地収入にまつわるテーマなどと様々であった。沖縄が抱える基地問題に関するテーマが24個だけとは思わないが、そのカードを用いて「基地問題に対して肯定的か否定的か」を縦軸、「与える影響と規模は広いか狭いか」を横軸とし、第1象限～第4象限に4分割した図を作成した。全体的に否定的な方向に偏った図となったが、否定的な意見の中でも過激なものとは違うものが見られた。作成後、ガイドの方に用意して頂きたいいくつかの質問に沿って24枚の証言カードの中から1枚を選ぶワークを行いワークショップは終了した。

ワークショップを通して様々な学びがあったが、まず驚いたのは24枚の証言カードである。「基地問題」が簡単に片づけることのできない問題であるという事実をあらためて考えさせられた。こ

れだけ多様な主張が、基地があるというだけで生まれていると思うと、沖縄に対する基地の影響力は凄まじいと感じる。本土にいる私としては、思考を凝らしても基地問題から24個もの課題を考え出すことはできないなと思ったが、24個すべての主張に対して「確かにそうだよな」と納得できるものがある、沖縄の抱える基地問題の多さと、ゼミで多少先行学習しただけでは全然理解しきれなかったことに驚いた。

ガイドの方が用意してくれた質問の中に「沖縄の基地問題の中でも1番最初に解決すべき課題は何か」というものがあった。私は理不尽さや日米の関係性の観点から「裁判権」のカードを最初に解決すべき課題に挙げた。しかし、班員の意見や対話を交えることで「解決すべき問題なのは間違いないけれど、もっと優先するべきものがあるかもしれない」と考え直し、最終的に「事故・危険性」のカードを選んだ。10分にも満たないかもしれない話し合いだったが、それだけで最初の意見が変わったため、話し合いをすることの大切さと、基地問題の中に考えるほど軽視できない問題がたくさんある事をワークショップのおかげで知ることができた。

なお、私が選んだ「事故・危険性」のカードも、沖縄研修3日目の最後では、また別の「近くに基地がない」カードに変わった。実際に訪れて異なる立場の意見を聞くことや、沖縄を見て歩いて学ぶ中で、自分の意見が何度も大きく変わっていったことが実感できる。その度に基地問題の複雑さと解決が困難な理由を再認識することができた。

そもそも沖縄の基地についての問題は、ここで検討した24枚の意見にはおさまらないほどに多様だ。実際、班のメンバーや隣の班も私と異なるカードを最初に解決すべき課題に挙げていた。だがテレビやネットメディアで沖縄についての議論がなされるときは、非常に単純化された形で「沖縄の基地問題」が提示されることが多い。このように

複雑な基地問題をひとつの括りにして同じテーブルで語らせることは、各々の主張が食い違って絶対に1つの答えに絞れないし、議論は白熱するけれど解決するつもりがないのと同じようなことなのだと学ぶことができた。

5. 辺野古の姿と様々な住民の考え

佐藤 優哉（1・2） 新井 荒太（3・4）

（1）基地建設が進む海を眺めて

私たちが訪問した際はあいにくの雨であったが、それでもわかるほど辺野古の海は青くきれいであった。そうした景色を一望できる砂浜のすぐ近くで新基地の建設は着々と進んでいるように見えた。巡回する警備員もいた。

案内をしてくださった「さびら」の島袋さんによれば、辺野古周辺の海域は好漁場として知られており、かつては多くの漁船でにぎわっていたという。また大浦湾には約5800種の生物が生息しており、中には絶滅危惧種も生息しているという。しかしながら、地球温暖化による生態系の変化などの複合的な原因により漁獲量が減少する中で、漁師の一部は基地建設に反対する抗議船を監視する仕事に就いていた。複合的な原因があるとはいえ、辺野古の海は基地建設をめぐる争いの舞台となってしまったといえる。

ここで辺野古の歴史を見ていきたい。太平洋戦争末期の沖縄戦において、辺野古には戦争避難民の収容所があった。終戦後米軍の支配下に置かれ、1956年からはキャンプ・シュワブが建設された。キャンプ・シュワブ建設を巡っては、当時住民と統治者である米国民政府との間で対立があったが最終的には建設に至った。かつて林業で生計を立てていた住民の生活は一変し、移住者を中心に米軍兵士向けの飲食店やバーなどで生計を立てる人が増えた。その後、辺野古新基地建設を巡っては、2013年に沖縄県が普天間基地の県内移設断念を求める建議書を提出するも、日本政府は真剣に受け



辺野古の海と新基地建設現場

付けず、2019年の県民投票において反対票が43万票となるも、現在に至るまで工事は続けられている状況である。

以上辺野古の現状と歴史についてまとめた。次項では、辺野古基地建設に反対する住民の話を基に、辺野古の姿について住民目線から見ていきたい。

（２）基地建設に反対する住民の意見から考える 辺野古の姿

辺野古の海を見学した後、基地建設に反対する地元住民の一人である西川征夫さん（以下西川さん）と名護市議会議員である大城敬人さん（以下大城さん）にお話を伺った。

西川さんは現在78歳であり、53歳から住民運動を始め25年となる。7年前に解散した、基地建設に反対する住民運動「命を守る会」の初代代表も務めていた。西川さんはもともと基地建設を容認する立場であり、若い頃はキャンプ・シュワブで働いていた他、基地建設を請け負う建設会社に場所を貸すなどしていた。反対派となるきっかけとなったのが1997年に反対派集会に参加したことで

ある。元々西川さんは新基地によって辺野古はさらに盛り上がると思っていたが、その実態や規模の大きさを知るにつれてむしろ弊害のほうが大きく、今ある辺野古を守るために反対派となり、「命を守る会」の初代代表となった。

このように反対派の住民がいる中で、同年、名護市で住民投票が行われた。住民投票自体は反対が過半数を占めたが、当時の市長が受け入れを表明して辞任し、その後の市長選で容認派の市長が誕生したことで、名護市は条件付き受け入れを表明することになる。こうした経緯から新基地建設計画はスタートし、西川さんの長い戦いも始まったのである。

大城さんは京都で生まれたが、両親が名護市出身である。長きにわたって名護市議会議員を務め、また新基地建設に反対の立場を貫いている。西川さんとは1997年の反対派集会で出会ったそうだ。

二人のお話を聞いて感じたことは、新基地建設に反対する声は年々縮小し、反対派も高齢化している、ということだ。西川さんが「命を守る会」を創設した際は多くの若者も同調していたが、次第に基地問題よりも経済を優先するべき、という

思考となり、会員は減少していったそうである。また漁師が漁ではなく反対派を監視するために船を出している、というお話を聞いた際は、基地建设によってそれまでの住民の生活は大きく変わってしまったのだと実感することができた。

西川さんはこれまでも、そしてこれからも非暴力での運動を行っていくそうである。私は生活を守るため、故郷を守るために行動する姿を見て、政府と米軍は住民の意見に耳を貸すべきなのは、と感じた。辺野古住民の様々な意見や考えを踏まえて、行動計画を見直していくべきなのでは、と感じた。

加えて、これまで数々の基地建设に反対する意思表示が県や住民から発せられ、沖縄としては新基地建设に反対が示されてきた。それにもかかわらず、そうした声を無視し建設を進めることは、果たして民主主義といえるのだろうか。現在の沖縄の現状は、日本の民主主義の在り方について見るうえで絶対に外すことのできないピースであるといえる。

(3) 辺野古集落を歩く

私が沖縄県名護市辺野古区を歩いてみた感想としては「思ったよりも住宅街なんだな」というものである。私たちが訪れた時が平日の昼間であった影響もあるかもしれないが、たしかにタトゥーショップやバーらしきものは散見されたものの、辺野古杜郊街という割には開いているお店は少なかったし、人通りもあまりなく、ゼミでの事前学習で聞いていたアップルタウン、基地の町としての華々しさを感じることはなかった。

集落散策全体で感じたことは、とても勾配が激しいということだ。ゼミでの事前学習において、上部落や下部落というような単語が出ていたことから長崎県のように斜面に町が形成されているのだと思っていたが、所々に起伏がありつつ、坂もかなり急なところもあって、これは実際行かない



ドローン規制を周知する看板

とわからないことだなと感じた。

集落散策の後半で辺野古区運動公園に訪れた。そこでは3年に一度、とても太い綱で行われる綱引きが行なわれていたようだ。そんな運動公園の入り口で、通常では見ないような興味深いものがあった。それはドローン等の飛行禁止と書かれた看板である。この看板は最近になって沖縄の各地の米軍関連施設に設置されるようになったそうである。設置理由はもちろンドローンによる米軍施設上空への侵入を制限する旨の内容であるのだが、飛行禁止を決めているのはアメリカ側ではなく日本政府、特に外務省が関与しているということが興味深かった。

(4) ツッカーさんの話を聞いて考えたこと

辺野古で生まれ育った30代の男性、嘉陽さん(以下、愛称のツッカーさんと表記する)は、平日は沖縄本島中部にある米軍基地で、車両整備の事務職員として働きながら、週末には辺野古で「RAMEN HOUSE ARIGATO」というラーメン屋を営業している。ツッカーさんがラーメン屋さんを始めたきっかけとしては、昼間、辺野古には飲食店が少なく、放浪していた米兵をみて可哀想だと思ったからだそうで、今後の夢としてはお寿司屋さんをやってみたいとのことだった。

そんなツッカーさんの話を聞いて驚いたこと

は、ツッカーさん自身は基地について賛成でも反対でもないということだ。お店に来る米兵を取り締まるキャンプサービス（軍警）の不遜な態度にはムツとしつつも、前述された西川さんたち反対派を気づかぬ間に敬遠していたそうで、西川さんたちのような方々は特別に見えていたという。また、ツッカーさんの思う基地問題は西川さんたちのように基地建設反対・基地をなくすというものではなく、ツッカーさんたち若い世代としては「基地とどう向き合っていくか」が基地問題であり、ここに大きな問題があると考えているようで、県民の中で同じ基地問題ということでも基地をなくす前提の人たちと基地との関係をどうするかという人たちで対立することで、県民のなかで意見を共有団結できていないことが問題なのではないかと語っていた。また反対派に高齢者の方が多い理由については、高齢者の方々は簡単に引越したりできないことが関係しているのではと語っていた。

そんなツッカーさんの話を聞いて考えたことは、基地問題は賛成派、反対派の二つに簡単に分けられるようなものではないということだ。私は最初、ツッカーさんが基地賛成派の住民として呼ばれたのだと思ってお店を訪れたが、実際は、お店の開店理由は米兵がかわいそうだったからであっただけでも、これは、基地がどうこうよりも、米兵はあくまで普通の人として接しているからこそその行動であるし、米兵に対して嫌なことはキャンプサービスの不遜な行動に加えて米兵の麻薬所持などが店内において発覚した場合は、関係の有無にかかわらず営業停止に追い込まれてしまい、またこの権力の行使に対してツッカーさん側、つまり日本の国民側からは対処する方法がなく、米軍というシステムに問題があるという考えだという。つまりツッカーさんにとっての基地問題とは、基地をなくすかなくさないかという問題ではなく、基地があるという前提のもとに、そこで起き

ることに對してどうするか、ということなのである。

この考え方は沖縄においても決してメジャーな考え方ではないそうであるが、それは裏を返せば、この場でしか聞くことができない貴重な意見だということでもある。それは私にとって、とてもよい経験であった。

【参考文献】

熊本博之、2022『辺野古入門』ちくま新書

6. 基地の跡地利用

岩浪 圭佑

まず跡地利用の現状について数字を使いながら述べていきたい。「駐留軍用地跡地の利用状況調査」(2015.3.31現在)によると、返還面積約1.3万haのうち、公共利用(2,622ha)が21%、個人、企業の利用(3,919ha)が31%、自衛隊の利用(489ha)が4%、米軍再提供地(320ha)が2%、保全地(4,011ha)が32%、利用困難地等(1,278ha)が10%とある。

次に跡地利用の現状を場所ごとに述べていきたい。沖縄中南部にある「ボロー・ポイント射撃場跡地」は農地・公園・ゴルフ場・リゾートホテルとして、「読谷補助飛行場跡地」は農地・農業支援施設・村役場・スポーツ施設として、「メイモスカラー射撃場・ハンビー飛行場跡地」は大型商業施設・住宅地として、「西普天間住宅地区跡地」は健康医療拠点・住宅地・道路・公園・公営墓地として、「牧港住宅地区跡地」は大型商業施設・住宅地・道路・公園として、「那覇空軍・海軍補助施設」は自衛隊・市街地・大型商業施設として、「那覇サービス・センター跡地」は武道館として、「嘉手納弾薬庫基地跡地」はダム・保全地・農地・商業施設として、「天願通信所跡地」は市役所・商業施設・住宅地として、「泡瀬通信施設跡地」は住宅地・公園として、「アワセゴルフ場跡地」は医療施設・大型商業施設・スポーツ施設・住宅

地として、「知念補給地区跡地」はゴルフ場・福祉施設として、「南部弾薬庫跡地」はゴルフ場・農地としてそれぞれ利用されていると資料に記録されている。

また沖縄北部にある「安波訓練場跡地」はやんばる国立公園・自然体験施設・世界自然遺産として、「VOA送信所跡地」は農地・市街地・リゾートホテルとして、「恩納通信所跡地」は体験学習施設・恩納通信所跡地リゾート計画に向けた整備として、「北部訓練場跡地」は農地・ダム・やんばる国立公園・世界自然遺産として、「キャンプ・ハーディー跡地」は国際交流センター・リゾートホテルとして、「ギンバル訓練場跡地」は医療施設・サッカー場・温泉施設や宿泊施設としてそれぞれ利用されていると資料に記録されている。

ではここで、跡地利用の成功事例としてよくとりあげられる、桑江・北前地区の跡地利用（アメリカンビレッジ）、および行政と地権者とが協働して行った跡地利用の事例である小禄金城地区の跡地利用について詳しくみていこう。

桑江・北前地区の跡地利用がもたらす効果については、「ハンビー飛行場跡地(北前地区)は、海浜公園やショッピングセンターなどが整備され、その周辺には飲食店や衣料・雑貨店などが立ち並び、週末にはフリーマーケットが催されるなど、商業集積が急速に進展しました。(中略)メイモスカラー射撃場跡地(桑江地区)についても、効率的な土地利用を図るため、背後地に49ha海浜埋立を同時進行させ、運動公園や住宅、商業地、公共駐車場など(中略)として発展しています。」とある。また、直接経済効果が返還後には年に336億円に、雇用誘発も返還後には3377人に増加した

次に小禄金城地区の跡地利用がもたらす効果については、「行政と地権者との三者が一つになってまちづくりの計画を練っていく事になりました。その先進的な取組の結果、地区を特徴づけるゾーニングや歴史や文化を大切にしたいまちづくり

が行われ、(後略)」とある。また、直接経済効果が返還後には年に489億円に、雇用誘発も返還後には4885人に増加した。

次に那覇新都心地区の跡地利用がもたらす効果については、「国の第2地方合同庁舎、沖縄振興開発金融公庫、沖縄職業総合庁舎、県立博物館・美術館などの公共施設、大型ショッピングセンターや飲食店などの商業施設、アパートやマンションなどの住宅施設が多数建設(後略)」とある。また、直接経済効果が返還後には年に1634億円に、雇用誘発も返還後には16475人に増加した。

次に読谷補助飛行場跡地の跡地利用がもたらす効果については、役場庁舎や文化センター、グラウンドなどを整備して新しい村のまちづくりの拠点として生まれ変わることが出来たり、「地形と飛行場跡の景観を活かした個性ある田園空間の形成、大規模な農地整備と農業生産法人の育成により地域振興を推進」とある。

次にギンバル訓練場跡地の跡地利用がもたらす効果については、「沿岸部においてはホテル等の建設とともに、ビーチを造成する海岸環境整備事業に着手(中略)新たな地域資源として2015年に湧出した温泉の活用を進め、多世代の地域雇用促進を図ることにより、『近き者悦(よろこ)び、遠き者来る”里づくり”』の具現化に向けて進んでいます。」とある。

最後に跡地利用を進めていくうえでの課題については、「跡地利用では整備区域と周縁既存市街地の境界部のなじませ方も重要(中略)”歩行者”が通行できる接続道は住民相互の交流や防災上必要」、「勉強会による気運の醸成、地権者組織の検討、地権者・市民等の気運の醸成、跡地利用基本方針、環境アセスメント、立ち入り調査、跡地利用計画、事業認可、土地の引渡し、跡地整備」と記録されている。また、沖縄持続的発展研究所の真喜屋美樹所長は、跡地利用の課題について、「地球規模で関心が高まっている環境に軸足を置く跡

地利用が求められる。(中略)そのためには、跡地利用を推進するための法整備、財政制度の充実が必要」だと指摘している。沖縄の環境を壊さずに維持していくには、この方法がもっともしくりくるものがあった。

このようなことを知ってから自分は沖縄に対して、「楽しいリゾート地」というイメージから「どう発展していくかを日々模索している場所」というイメージが変わった。なので色々あった沖縄研修で得たことは、決して意味の無いものではなかった。

【参考資料】

沖縄県、2022、『沖縄県の基地跡地利用について－変遷とこれからの跡地利用』

7. 普天間基地の周辺に住むということ

前野 達士

沖縄研修も最終日に差し掛かり3日間の総まとめとなるこの日は、まず宜野湾市の普天間基地を起点として、基地と隣り合わせの生活を少しでも体感しながら、住民の視点となって基地問題を考えるというフィールドワークで始まった。散策した場所は普天間第二小学校、上大謝名さくら公園、沖縄国際大学、そしてその周辺の集落といった形で、2時間ほどの限られた時間での散策だったが、生活者の身になって基地と共存することの大変さを実感することができた。

まずは基地と隣り合わせの生活が生まれるようになった経緯からみていく。

<普天間基地の概要>

沖縄県宜野湾市にある在日米軍海兵隊の軍用飛行場として使用されている普天間航空基地は、海兵隊のヘリコプター部隊の飛行場として使用されており、2700mの滑走路を持ち、宜野湾市の中心部に位置する。その面積は約4.8km²にあたり、宜

野湾市の面積(19.5km²)の約25%を占めている。

宜野湾市の中心4分の1を占領し、基地として利用されることになったのは、1945年の沖縄戦の最中、米陸軍工兵隊が強制的に宜野湾、神山、新城、中原の4つを強制接收し、上陸とともに普天間飛行場が建設されることになったからだ。米軍上陸以前は多くの集落が存在し、中でも宜野湾村の中心、字宜野湾という場所は現在の普天間飛行場の中に存在していた。ここは郵便局や病院、役場などが並ぶ住民にとって大切な場所であったが、驚異的な速さで飛行場へと生まれ変わってしまった。そして住民が避難する間や収容所に入られている間に、米軍が利用価値の高い土地を接收したため、戻ってきた住民は自分の故郷へ帰りたくても帰ることができず周辺に住むことしかできない状況が作られてしまった。これが基地と隣り合わせの生活を営むようになった発端といえる。

<周辺の散策>

朝、那覇市内のホテルを出発し30分ほど車を走らせ、入り組んだ路地に入っていくと普天間第二小学校が見えてきた。この小学校は2017年に体育の授業中、校庭に米軍の大型ヘリから窓が落下する事故があった場所だが、私たちが散策したこの日は、かなり多くの普天間飛行場常駐の軍用機を確認することとなった。コーディネーターの狩俣さんが屋外で私たちに説明している際に戦闘機が飛び、数分後にはオスプレイが飛び交い、説明する声が聞こえにくい状況になった。事前学習において軍用機が上空を通る際は授業が中断してしまうという資料を読んでいたが、実際に自分がその状況を経験して、この音では中断してしまうのも無理ないと感じた。

それと同時に、過去に墜落事故も起こしており、今後は墜落しないという確証も無いし、その安全が保障されることも無ければ、騒音によってス

ムズな授業も行えないという精神的苦痛も日々感じている生徒や周辺住民にとって、普天間基地はどのように映っているのだろうか、と考えた。私自身がこの周辺に住んでいて、初日におこなったワークショップで用いた24枚のカードの内から1つ選ぶとすれば、間違いなく「事故・危険性」のカードを選ぶだろう。堕ちるわけがないと思っていてもそれが現実になってしまったとき、慌てて考え出すようでは、再びアメリカのペースになってしまうと思ったからだ。

そして次なる目的地は普天間第二小学校の近くにある上大謝名さくら公園である。直線距離で車を利用すると5分ほどで行けるはずだが、突っ切ることができないため基地に沿って迂回する必要がある、それほど近くにあるような感じはしなかった。

到着してまず驚いたことは、先ほどの小学校よりも明らかに基地に近かったことだ。基地と公園を仕切るフェンスが無ければそのまま入ってしまうのではないか、もう同じ敷地なのではという感想を持った。とてもきれいな公園で、放課後に小学生が集まるには最高の場所だと思うが、視線の先にはフェンスと、この先に滑走路があることを意味する誘導灯が飛び込んでくる。この誘導灯を見たときに一気に危険度が増したような感覚を覚えた。

公園の隣で軍用機の離着陸が日頃から行われ、子どもたちの声で賑わう公園が危険に晒されていると思うと、安全とは言えないと感じた。私たちがこうして公園で説明を聞いている際に、墜落事故が発生する可能性も十分にある。このように基地問題を考えている間にも、不慮の事故で何の罪もない人々が命を落としてしまうリスクがある。そこで「安全」が守られているという状態は、一体何なのかという疑問を持つようになった。

最後の目的地は2004年に普天間基地所属のヘリが校舎に墜落した沖縄国際大学だ。当時の事故で

衝撃的だったことは、日本で発生した事件なのに、アメリカ側が捜査を独占し日本の警察や政府が立ち入れなかったという事実だ。どう考えても「おかしい」対処の仕方なのに、それを黙って見ることしかできないことの無力さや無念さ、そして横暴なアメリカ側の姿勢がわかりやすく表れてしまった事件だと感じる。幸いにも怪我人や犠牲者は居なかったことがせめてもの救いだが、もしこの事件で犠牲者が出てしまっていたらアメリカはどのような対処をし、どう日本側に説明したのだろうか。恐らく犠牲者が出ていてもアメリカの態度が変わることは無く、犯人を逮捕することもなく何の罪も負わされることはなかっただろう。

実際の事故現場をみて、こんな近くに住宅が密集する中で、何メートルかずれていたら人々が暮らす住宅や道路に墜落していてもおかしくない所だと感じた。もちろん墜落したのが大学で良かったとも思わないが、日本人として唯一立ち入ることができたのはビザの配達に来た店員であったという話を聞いて、米軍からするといつも通りというような、たいして重い事件と捉えていないように思えた。その後、日米地位協定に阻まれ、事件の全容解明に至らなかったため、基地問題のすべては日米地位協定の改定に繋がっているのではと考えた。

だが改定を望む前に、沖縄県民だけでなく国民全体として、さらには一人ひとりとして現状を把握する必要があると感じた。だからこそどれだけ考えても解決に向けた答えは1つとは限らず、どれを取っても重要なことばかりで、優先的に変えていきたい問題ばかりがああ24枚のカードには並んだのだろう。そのため沖縄に住んでいる人に意見を求めても、住んでいる土地、生まれ育った環境によって基地問題へのアプローチは変わるだろう。だからこそ自分が1番優先的に解決すべきと考える問題を、自分の言葉で説明できるようになることこそ、私たちが取り組んでいける最大の

基地問題だと考えた。

8. 嘉数高台

鹿児島 有志

嘉数高台は沖縄県宜野湾市に位置しており、沖縄戦で日本軍とアメリカ軍の2つの軍が攻防を繰り返した激戦地である。またアメリカ軍を進軍させないための第1防衛ラインであった。この嘉数高台での戦いで、アメリカ軍は、「1日もあれば突破できる」と想定していたが、実際のところ日本軍は16日間アメリカ軍を足止めしていた。そのことから、アメリカ軍から「いまましい丘」などと呼ばれている（宜野湾市ホームページ「嘉数高台」より）。

当時、沖縄戦が始まった1945年の1年前から日本軍は沖縄に上陸し、アメリカ軍を迎え撃つために戦争の準備を行った。嘉数高台でもアメリカ軍に向け、準備して作られたものがある。「陣地壕」や「トーチカ」である。陣地壕とは日本軍が陣地を構えるために掘られた、軍専用の人工壕であり、陣地壕のような陣地を作るために、嘉数の住民をはじめとして、多くの集落から人々が駆り出された。宜野湾市ホームページの「嘉数高地」の項には、「話によると朝は8時から午後は5時頃まで作業をし、それ以外の日に農業をするといったような生活だったようです。また男性は徴兵されていたことから、老人や女性なども作業に行っていたようです。」と記載がある。陣地壕を作る作業をしている人の中に、女性、さらに老人までもがいたということであり、老人までもが作業しなければいけないほど、沖縄戦は過酷だったのかと感じた。

次にトーチカとは、分厚いコンクリートでおおわれている陣地のことであり、機関銃や、大砲を置くための場所とされている。トーチカとはロシア語で「拠点」という意味であり、自分の身を守りながら敵軍を攻撃するという役割があった。そ

のためとトーチカには現在でも弾痕がかなり残っており、当時の戦争の激しさを物語っている。沖縄研修では平和祈念資料館や、ワークショップ、西川さん、ニッキーさんなど、さまざまなものを見学し、話を聞いたが、嘉数高台公園で見たトーチカの弾痕は私自身の中で特に印象が残るものであり、沖縄戦の激しさがより伝わってきた。

嘉数高台は現在では「嘉数高台公園」として存在し、沖縄に住んでいる人々の憩いの場となっており、トーチカや陣地壕以外にも地球儀をイメージした展望台や、沖縄戦の犠牲者を慰めるための「慰霊の塔」が建てられている。嘉数高台公園にある慰霊の塔には、「京都の塔」や「嘉数の塔」「青丘の塔」など、いくつか種類がある。京都の塔は嘉数高台に駐屯し、戦っていた日本兵たちの多くが京都出身であったため、その人達の慰霊碑である。沖縄戦で亡くなった京都府出身の日本兵は約2500人とされている。そして嘉数の塔は沖縄戦で巻き込まれた嘉数の集落の住民のための慰霊碑である。

この京都の塔と嘉数の塔は隣合わせで設置されている。日本兵の慰霊碑と住民の慰霊碑が隣合わせであるのは、とても珍しいと言われているが、なぜそうなのか。それは当時日本兵が嘉数の住民の家に民泊をしており、寝食共に一緒に過ごしていたからであり、日本兵と嘉数の住民がより関係性が良く絆が深いとされていたからである（だが、これはあくまで嘉数の住民と日本兵の関係である）。

次に青丘の塔とは朝鮮人の慰霊碑のことであり、当時の朝鮮半島は日本の植民地であった。そのことから朝鮮半島から日本に強制招集され、一緒に労働をさせられていた。またこの中には慰安婦もいたとされている。沖縄の住民の人たちは構造的にみるととても権力が無く、立場的にも下にみられていたが、沖縄住民よりも下とされていたのが朝鮮人であり、沖縄の人たちからも差別を受

けていたという。

本来、戦争は軍隊だけが戦うとされているが、沖縄戦では軍隊だけでなく、住民も一緒に戦っている。戦うというより、戦わざるを得なかったのである。また、ともに戦わざるを得なかったことで起きた問題とは何か。住民の人たちは軍のように、訓練をしているわけではなく、武器もあまり使ったことがない。そのことから、手榴弾を渡され、自爆攻撃を強制的にさせられていたことが問題としてある。さらに一緒に戦いに参加させられていた住民の中にはアメリカ軍のスパイとして見なされていたことも問題としてあった。また手榴弾は一世帯当たり1つ渡されており、「アメリカ軍に捕まるくらいなら自爆しろ」などの命令もされていた。

沖縄研修が始まる時と終わった時で、沖縄に対しての見方は変わった。沖縄県における基地問題の現状や、沖縄戦の歴史について知ることができた。また何不自由なく日常生活を送れていることがどれだけ幸せなことだということを実感した。話を聞くこともとても大切だが、慰霊碑や、トーチカ、陣地豪など悲しい歴史として実際に残っているものをもっと全国民に知ってもらうべきではないのかと感じた。

おわりに

熊本 博之

3年ぶりに実施した今回の沖縄研修では、「さびら」の協力もあり、従来よりも幅広く、沖縄についての学びを深めることができた。沖縄戦から米軍占領期を経て、復帰後も米軍基地が残り続ける沖縄について、その歴史的な流れを踏まえながら学んだ経験は、学生たちにとってのみならず、引率した自分にとっても大きなものとなった。

研修のテーマは「米軍基地が沖縄にもたらしたもの」であるが、言うまでもなく在日米軍基地は沖縄だけにあるわけではない。また沖縄が望んで

米軍基地を受け入れているわけでもない。どのような側面からみても、「日本の基地問題」なのであり、私たちはすべて当事者性を持っている。そのことにも気づく機会になったのではないかと思っている。

とはいえ、沖縄に在日米軍基地の約70%が集中していることは事実であり、それゆえに沖縄の人たち、特に沖縄本島に住む人たちは、米軍基地を近くに感じながらの生活を余儀なくされた。そのような生活における米軍基地の存在は、初日のワークショップで示された24の意見からも明らかのように、賛成／反対、メリット／デメリットで割り切れるようなものではない。そのことを、研修を通して肌身で感じ取ったであろう学生たちは、米軍基地に対する沖縄の様々な応答を、より深く理解できるようになったはずだ。そうした学生を1人でも多く増やしていくことの重要性を再認識させられた研修であった。